聖　霊

第 13 回　聖霊のバプテスマと異言の賜物

□アウトライン

1. 聖霊のバプテスマに伴う異言は、救いの門が開かれた各グループの最初だけ
   (1) 第一のグループ、十二人の使徒たち（ユダヤ人）
   (2) 第二のグループ、サマリア人
   (3) 第三のグループ、ローマ人（異邦人）
   (4) 第四のグループ、洗礼者ヨハネの弟子たちで離散の地にいてイエスのことを知らなかったユダヤ人たち
   (5) 一度開かれたことが確認されると、そのグループ内で新たに信者になる人がでても、異言のしるしは繰り返されなかった
2. 異言の賜物を集会の場で用いる目的とそのときのルール
3. 異言の賜物についての使徒パウロの解説

---

1. 聖霊のバプテスマに伴う異言は、救いの門が開かれた各グループの最初だけ

(1) 第一のグループ、十二人の使徒たち（ユダヤ人）

使徒 2 : 4　**すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。**

- **皆が・・・**1 : 15 の「百二十人」ではなく、1 : 26 の十二人の使徒たちを指す。2 : 7 では「みな、ガリラヤの人」、2 : 14 では「ペテロは十一人とともに立って」とある。

(2) 第二のグループ、サマリア人

使徒 8 : 17～18　**そこで二人（ペテロとヨハネ）が彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手を置くことで御霊が与えられるのを見**

て、使徒たちのところに金を持って来て、

- ここには、サマリア人の信者たちが異言を語ったことは記されていないが、聖霊を受けたことを「**見る**」ことができたということは、第三者が見聞きできる異言の賜物が現れたと推定できる。

(3) 第三のグループ、ローマ人（異邦人）

使徒 10：44～47　**ペテロがなおもこれらのことを話し続けていると、みことばを聞いていたすべての人々**（ローマ軍百人隊長コルネリウスと彼の親族や親しい友人たち）**に、聖霊が下った。割礼を受けている信者で、ペテロと一緒に来ていた人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたことに驚いた。彼らが異言を語り、神を賛美するのを聞いたからである。するとペテロは言った。「この人たちが水でバプテスマを受けるのを、だれが妨げることができるでしょうか。私たちと同じように聖霊を受けたのですから。」**

(4) 第四のグループ、洗礼者ヨハネの弟子たちで離散の地にいてイエスのことを知らなかったユダヤ人たち

使徒 19：1b～7　**パウロは内陸の地方を通ってエペソに下り、何人かの弟子たちに出会った。彼らに「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」と答えた。**
「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」と尋ねると、彼らは「ヨハネのバプテスマです」と答えた。
そこでパウロは言った。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」
これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりした。その人たちは、全員で十二人ほどであった。

(5) それらのグループに救いの門が開かれたことが一度確認されると、そのグループ内で新たに信者になる人がでても、異言のしるしは繰り返されなかった。

2.　異言の賜物を集会の場で用いる目的とそのときのルール

(1)　目的は、教会を成長させるため。異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈らねばならない。

Ⅰコリ 14：10～13　**世界には、おそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばは一つもありません。それで、もし私がそのことばの意味を知らなければ、私はそれを話す人にとって外国人であり、それを話す人も私には外国人となるでしょう。同じようにあなたがたも、御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会を成長させるために、それが豊かに与えられるように求めなさい。そういうわけで、異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。**

①　目的は、教会を成長させるため。そのためには、異言で語られた内容が明らかになる必要があるので、異言の賜物だけではなく、異言の解き明かしの賜物も同時に現れる必要がある。
②　異言を語る信者は、異言を教会で語ろうとするなら、それを解き明かす賜物をもった信者が教会の中に現れるように、祈らなければならない。もし、現れなければ、教会の集会では、異言を語ってはならない。

(2)　ルールは、次のとおり

Ⅰコリ 14：27～28　**だれかが異言で語るのであれば、二人か、多くても三人で順番に行い、一人が解き明かしをしなさい。解き明かしをする者がいなければ、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語りなさい。**

①　1 回の集会で、二人か、多くても三人で順番に行う。
②　一人が解き明かしをする。
③　解き明かす者がいなければ、教会では黙っている。

3.　異言の賜物についての使徒パウロの解説

(1)　異言の賜物は、語る人自身を成長させる

Ⅰコリ 14：2～4　**異言で語る人は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊（霊）によって奥義を語るのです。しかし預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します。異言で語る人は自らを成長させますが、預言する人は教会を成長させます。**

- **御霊**・・・原文のギリシア語「プニューマ」は、定冠詞なし・頭文字小文字なので、神の霊ではなく、人間の霊である。Ⅰコリ 14：14　**もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。**

①　異言は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語る＝神への祈り
②　異言の内容は、だれにも理解できないが、奥義である。
③　異言を語るのは、語る人自身の霊である（聖霊ではない）。よって、異言を語ろうとするのも、語るのを止めようとするのも、その人自身でコントロールできる。
④　異言の賜物は、語る人自身を成長させる。

(2)　パウロの個人的願望は、皆が異言で語ること

Ⅰコリ 14：5　**私は、あなたがたがみな異言で語ることを願いますが、それ以上に願うのは、あなたがたが預言することです。異言で語る人がその解き明かしをして教会の成長に役立つのでないかぎり、預言する人のほうがまさっています。**

- **みな異言で語ることを願う**・・・パウロには、異言の賜物が与えられていた（Ⅰコリ 14：18）。ただし、異言に限らず、聖霊の賜物は、だれにどの賜物を与えるかは聖霊がみこころのままに定めておられることである。異言の賜物が信者全員に与えられていることはあり得ない。ここでパウロが願うと言っているのは、個人的な願いであって、そうでないことはわかっているが、という意味が含まれている。このような個人的願いを記した箇所は、他にもある（独身の賜物、Ⅰコリ 7：7）

(3) 異言は、不信者のためのしるし

Ⅰコリ 14 : 21～22　**律法にこう書かれています。「『わたしは、異国の舌で、異なる唇でこの民に語る。それでも彼らは、わたしの言うことを聞こうとはしない』と主は言われる。」それで異言は、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのためのしるしであり、預言は、信じていない者たちのためではなく、信じている者たちのためのしるしです。**

- 律法（＝旧約聖書）からの引用は、イザヤ書 28 章 11～12 節。紀元前 701 年、イスラエルの不信仰のため、神はアッシリア軍を用いてイスラエル（南のユダ王国）を懲らしめた。エルサレムを囲んだアッシリア軍の陣営から聞こえてくる声は、異国のことばであった。「異国の舌、異なる唇」とは、当時のイスラエルの不信仰の結果、こうなったのだというしるしであった。同様に、教会に異言の賜物が与えられたのは、イエスをメシアではないと拒否した紀元 1 世紀のイスラエルの不信仰を示すしるしである。
- **信じていない者たちのためのしるし・・・**【未信者が信じるようになるためのしるし】という意味ではない。「**それでも彼らは、わたしの言うことを聞こうとはしない**」とイザヤの預言にあるとおり、イスラエルは頑なに不信仰を続ける。教会の異言は、イスラエルの不信仰のしるしである。